
ぼっちの信念

D . ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼっちの信念

【Nコード】

N9065Y

【作者名】

D・ナイト

【あらすじ】

何のために、孤独でいるのだろう。

自分が大損をしているのに、どうして抵抗を続けるのだろう。

友達などいないのに、なぜその信念を持ち続けるのだろう。

あなたにとって、「絶対に正しい」と「絶対に間違っている」とは何ですか？

2人組（前書き）

この小説には、かなり個人的な感情が入っています。

苦手な方はただちに小説を読むのを中止してください。

それでもいいという方は、ぜひとも続きをご覧ください。

俺の考えが、少しでも分かって頂ければ、これほどうれしいものはありません。

2人組

休み時間。

退屈な授業も終わり、クラスみんなは特定のグループで集まって楽しそうに話をしている。

次の時間もこの教室だ。移動する必要はない。このクラスのほとんど全ての生徒は、楽しい10分間を過ごしている。

そんな教室の一角。俺は、周りとは明らかに違う雰囲気を出している。

机に突っ伏し、タヌキ寝入り。「授業に疲れて寝ちゃいました」というのを装う。10分の間。

目はさえている。眠くなど全くない。10分が、異常に長く感じる。

クラスみんなは男女問わず、「グループ」というべき組織を独自に作っていた。作り方は簡単、仲がいい友達同士で数人集まれば完成だ。

グループで集まれば、それは楽しいだろう。会話も弾むし。

俺は、グループは作っていない。仲がいい友達なんて、1人もいない。

一人ぼっち。仲間外れ。それが俺だ。

タヌキ寝入りしつつ、周りの生徒の話し声に聞き耳を立てる。

「ねえ、昨日あの番組見た〜?」

「あ、私も見た〜! あの最後のクイズ分かんなくてショック〜」

「あたしすぐに分かったよ、マッチ棒を縦に3つ並べてそれにこうすると〜」

「・・・わ〜すごい! 何で私気付かなかったんだろう」

向こうの窓際で女子たちが話す、その番組だったら俺も昨日見た。確か、マッチ棒を3つだけ動かして別の図形に変えるところだったっけ。

なるほど、そうやってやるんだっただか。

「なあ、お前もあの新作ゲームの予約したか？」

「ああ、もちろん！ 予約特典がいいもんな」

「ヒロインのポスターだっけ？ 俺はあんまりああいふキャラは好きじゃねーと言うか」

「はあ？ じゃあお前はどのキャラがいいんだよ」

「さあな。だいたい、ゲーム出る前からそんなん分かっての」

黒板前では男子数人が新作RPGの話で盛り上がってるか。俺が思うに、あのゲームはクソゲーだと思うが……。

まるでアンテナの方向を変えるがごとく、あちこちでの会話に耳を傾ける。

独りぼっちだからね、会話になんか入れんよ。

・・・本当は、俺だってみんなの話に入りたい。無理だが……

午後になって、体育の授業が始まる。今日は持久走の記録だ。あー、嫌だ嫌だ……。仮病使って休みたい。

俺はこう見えて、部活は陸上の長距離をやっている。持久走には自信があるし、自分で言うのもなんだがこのクラスの中では1番体力があるだろう。

別に周りの連中のように、持久走そのものが嫌と言うわけではない。むしろ、走ることが好きだ。

俺が嫌なのは、別にある。

「はーい、好きな人と2人組作ってー！ 先走る方と後の方決めろー！ 走ってない方は周回数数えろよ、いいなー！」

出たよ、理不尽な組み分け。先生、だいたいさ、このクラスの男子

の人数ちゃんと知ってて言ってるの？ 17人だよ？ 奇数だよ？
余り出るよ？

仕方なく、俺は適当なやつを捕まえてお願いする。俺と組んでくれないか、と。

「あ、ごめん俺もう相手いつから」

案の定の返事。向こうにそそくさと行ってしまったあいつが、影で「チツ」とか言ってるのを、俺は聞いてしまう。

その後も2人くらいに話しかけたが、うまくいくはずがない。

・・・そりゃそうだよな。みんな友達いるもん。こんなぼっちとなんか、あえて組む必要ないもんな。

でもさ、たかだか相方の周回数を数えるだけだぞ？ そんなに露骨に反応しないでくれよ・・・。

それに先生、あんたも「列の前後で組め」とかの指示にしろよ。好きな人とだなんて言ったら、毎回だいたい同じになるに決まってるだろ。

「よし、だいたい2人組できたか？ できたやつは座ってるよ」「

ふと周りを見渡すと、みんな2人組ができて座っている。立っているのは俺だけだ。

・・・みんな、頼むからそんな冷たい目で見ないでくれ。すごくつらいんだぞ、俺からすると。

「おいおい、一人余ってるじゃないか」

見ればわかるだろ。つーか男子の人数確認しろよ。

「まあ・・・お前は陸上長距離だし、周回数言われんでも分かるよな？」

何ですかその先入観。まあ、どうせ一人ならもうそれでいいよ。

持久走は、まず男子がやり、その間女子はボール投げの練習をやっている。

その後女子が持久走をしている間、男子は入れ替わりでボール投げという順序だ。

俺は、男子の前半をやることになった。部活で使うランニングシューズに履き替え、スタートラインに並ぶ。

号砲とともに、駆けだす。俺は最前線に立ち、先頭を引っ張る。距離は1500m。別に問題はないだろう。

数人が俺の後ろにくっついて2周ほどしたが、やがて離れていった。完全独走となる。

だが・・・

「がんばれ〜 君〜」

「、行けるぞ〜!!」

圧倒的に俺は独走のはずだ。それでも声援は、俺の一つ後ろを走るやつに向けたものしかない。

俺は、見られてないんだな。

別に、そう言ったことには慣れてる。でも本心ではどこかで、声援されたい、という思いがあるのも事実だ。

つらいな・・・これ・・・

余裕の1着でのフィニッシュ。タイムも自分的にはそれなりだ。

・・・が、やはり誰も俺なんかに見向きもしない。存在すら消されてしまったかのよう。

2着のやつがゴールした時には、拍手と声援が鳴り響いた。女子が一斉に駆けつける。タオルをかぶせられる。

・・・何だこの扱いの差は。

俺はぼっちだ。友達なんかいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9065y/>

ぼっちの信念

2011年11月27日03時10分発行